

# 横光利一『歐洲紀行』と『厨房日記』の連続性

田本悠馬

## (一)『歐洲紀行』と『厨房日記』の連続性考察の意義

一九三七（昭和十二）年に刊行された『歐洲紀行』には、〈紀行文〉<sup>①</sup>だけではなく、「厨房日記」という小説が併せて収められている。「厨房日記」は、横光が欧州紀行を終えてから書いた最初の小説であり、雑誌『改造』に発表された当初は、多くの期待と注目を集めた作品である。

しかし、「厨房日記」に寄せられた評価は散々なものであった。中条（宮本）百合子は「義理人情」によって知性を否定するような見解について、「従来馴到された作家横光の読者と云へども知性を抹殺する知性の遊戯を快く受ける迄に、虚脱されてい<sup>②</sup>ない」と作品を批判している。中村光夫は「期待して読んだほどの力作ではな<sup>③</sup>かった」としたうえ、「土産話といった程度である」と一蹴する。横光と親しい間柄であった中島健蔵も「どうにもならない溝が掘られた」と発言するほどだった。結果として「厨房日記」は、「当時台頭しつつあつたファツシヨ的傾向に迎合するものとして誤解され<sup>④</sup>ることになつてしまつたのである」。

たしかに、「厨房日記」には「知性の到達出来る一種の限界までいつてゐる義理人情の完璧さのために、も早や知性は日

本には他国のやうには必要ないのだと思ふ<sup>6)</sup>。といったような観念的で飛躍した理論や封建的ともとれる発言が散見される。ただし、「厨房日記」に対する評価が散々なものになることを十分に覚悟したうえで書かれたものであったことは、「歐州紀行」を読めば一目瞭然である。横光は、「歐州紀行」の「八月十二日」に次のようなことを書いている。

私は今は無感覚な気持ちでソビエットの平原を眺めてゐる。何故かと云ふなら、これは日本ではないからだ。私にとつてロシアの平原の美しさは、ただ美しさにすぎぬ。共産主義、それは現在の私にとつては何事でもないのだ。私は日本を愛する以外に今は何もないと見える。

愛することの喜ばしさ。これこそ生活だ。私は日本のことを思ふと胸がどきどきしてならぬ。祖国といふ言葉の肉感を感じたことのない人人は定めし私のこの愛情をフアシヨと云つて攻撃するであらう。しかしそれは必ず間違つてゐる。私は人人にいきどほりを感じさせねばならぬ感傷を持つていない。しかし私は攻撃に合はう。私は私の胸を貫くどのやうな弾丸をも抜き取る術を覚えてゐる。<sup>7)</sup>

横光は、この時点ですでに自身の書いた内容が「フアシヨ」と誤解され、攻撃に合ふことを予見している。それでも、「私は私の胸を貫くどのやうな弾丸をも抜き取る術を覚えてゐる」と豪語し、ここからは誤解に基づく批判・攻撃に全面的に立ち向かう覚悟がここからうかがえる。「厨房日記」は多くの批判が寄せられることを覚悟したうえで書かれたものなのだ。この覚悟は、横光個人の覚悟である以上に、「作家」としての覚悟でもあった。横光は後年、「厨房日記」の解題で次のように述べている。

「厨房日記」は私の外国から帰つた年に書いたものである。特に私は外国へ行きたい積極的な意志をもつて行つたわけではなかつたが、偶然行くことになつたこの旅行も、日本を振り向いて眺め考へるのに一層の好機となつたことは争へない。私のここで得たものは語り尽くせぬものも多々あるが、日本人の知識階級の混迷の原因について知り得たことを最も収穫として挙げねばならぬ。われわれの祖先の苦心と現代人の知識の苦心は、その継ぎ目によるみがあり、空虚な大穴がそこにひそみ、いつ陥没が来るか計り知れぬ恐るべき断層が、ほとんど見返られることもなく横つてゐるといふ事実がある。われわれがこれに気付き徐徐にこれを意識にのぼすべき方法をとり、浮動することなく安定せしむべきことこそ作家の務めと思ひ、また日本人としての私らの当然しなければならぬ義務とも私は考へた。しかしそれにはなにより今は手段の考究が急務である。<sup>8)</sup>

横光は、ヨーロッパをめぐる旅において発見した「事実」を、「作家」として書き残さなければならぬと考えている。そして、それを描くための「手段」を考究することが「急務」であると覚悟したので。帰国直後に、「全く今のところ小説など書く気が少しも起らない。小説どころではなく物を書く気が全然起らないのである」と述べながらもあえて「厨房日記」を発表した点も踏まえると、この作品からは、ただ単に横光のヨーロッパ体験を読み取るだけではなく、欧州紀行以後の横光が、ひとりの作家としてどのように文学と向き合おうとしたのかという点まで読み取ることが可能になる。

そこで注目しなければならぬのは、各紙に発表された海外通信を〈紀行文〉としてまとめた『歐洲紀行』に小説「厨房日記」があわせて収められていることである。一九三〇年頃の〈紀行文〉や旅行記に目を向けても、作家自身の体験を綴つた文章と小説を併せて単行本にまとめることは特異な事例であり、「厨房日記」は作爲的に『歐洲紀行』に収められたと考えられる。

先行研究では、『歐洲紀行』と「厨房日記」の連続性が考察すべき点であることはしばしば指摘されているものの、ま

た論究はほとんどないのが現状である。中川智寛は『歐洲紀行』と「厨房日記」の関係性について、「純粹小説論」の影響や「金銭」、「義理人情」などのキーワードを列挙して、多面的に作品を分析している。中川は、ふたつの作品を「併せて読んだ場合、双方に通有される問題系が多い」として、「それらは「旅愁」とは別の次元で批判の対象とされてしかるべき諸事象ではあるが、「旅愁」周辺で作者横光が抱ひていた多くの問題意識を、一方から逆照射するものである」とまとめている。『歐洲紀行』と「厨房日記」とにまとりつき絡み合う諸問題を解きほぐそうとする中川の試みは評価できるが、その一方で、断片的な考察にとどまり、ふたつの作品に共通して内在する問題点を指摘するにとどまっている点は惜しまれる。『歐洲紀行』と「厨房日記」の連続性を考察するならば、共通点にだけ眼を向けるのではなく、相違点にまで眼を向けるべきである。欧州紀行から持ち帰った複雑な問題を横光がどのような手法で書き残そうとしたのかという点を考察しなければならぬだろう。

## (二) 横光作品における〈日記〉の扱い

『歐洲紀行』と「厨房日記」の連続性を考察する手がかりのひとつとして、〈日記〉の観点を挙げるができる。「厨房日記」そのまま、タイトルに「日記」の二文字が含まれている。『歐洲紀行』は、〈紀行文〉でありながら、多くの場面で〈日記〉の形式が用いられていた。作品内でも「日記は香港から書くことと思う」という記述があることや、妻宛の書簡では「日記は文藝春秋の五月号に乗るだらうと思う」と書いていることから、『歐洲紀行』にも〈日記〉の性質が内包されていると見ていいだろう。

ただし、『歐洲紀行』は〈紀行文〉を、「厨房日記」は小説を粹組とした作品である。そのため、このふたつの作品を単純に〈日記〉に分類することはできないかもしれない。それでも、「もし二種類の日記本文があるとすれば、それらを合わ

せ鏡のように照らし合わせて読むべきだろう」と竹盛天雄が述べるように、『歐洲紀行』と「厨房日記」とを合わせ鏡のように照らし合わせることで、単行本『歐洲紀行』に「厨房日記」が収録された意義が浮上してくるのではないだろうか。そこでまずは、横光作品における〈日記〉の扱いについて確認しよう。

横光個人の〈日記〉は、中学生時代に書いたものがわずかに残っているのみで、詳細かつ長期的に記した〈日記〉は、未だに発見されていない。現在、横光が残した〈日記〉として確認できるものは、雑誌等に発表したものが数点と、小説「日記」、「厨房日記」があるだけだ。本章では、『歐洲紀行』と「厨房日記」の連続性を考察する前段階として、横光が小説を書くにあたって〈日記〉をどのように扱っていたのかについて考えておきたい。そこで手がかりとなるのは小説「日記」（『経済往来』第八卷第八号夏季増刊新作三十三人集 一九三三年）である。この作品は「厨房日記」と同様に横光の実体験が題材になっており、この作品を分析することで、横光が〈日記〉をタイトルに掲げて小説を書くときのねらいが見えてくるはずだ。

「日記」の梗概は次の通りである。妻の出産を目前に控えた夫（「私」）は、妻が陣痛で苦しんでいるのに、ひとり桜の咲く時期を考えている自分のことを「をかしたものだ」と考える。子供が産まれ、帰宅した三日後、その子どもが「丹毒」に罹り、生命が救われる見込みのない状態に陥ってしまう。「私」は、子どもの無事を祈りながら医者を探し回るが、目当ての医者になかなかめぐり合うことができない。そうして日が暮れる。不幸が連続するなかで「私」は、「今日子供が死ななかつたといふこと」が、かえって子どもが助かる知らせのように思われはじめ、「全く何が幸ひなことになるか分からない」と感じるようになる。この「幸せな感想」を得たところで「この日の日記をここで終らうと思ふ」と物語は結ばれる。

この小説は、タイトルに「日記」とあるものの、〈日記〉の形式を取り入れた日記体小説であるとは言いがたい。佐々木が言うように、「一般に日記体小説と呼ばれる作品は、日記という形式を物語の効果をj得るために用いている。すなわち、日付と日付の空白を意図的に用い、日記の書き手が居る虚構の審級（第一次物語言説）を読み手に想像させるものが、日記

の形式を戦略的に用いた<sup>15)</sup>効果であるが、「日記」には日付や天候の記録はなく、形式的には〈日記〉の要素を含んでいない。同時代の〈日記〉に目を向けてみても、〈日記〉にはある程度形式に則ったかたちが求められている。たとえば、一九三七年に刊行された久米正雄の『文章の作り方』では、一般的な〈日記〉の形式について、「日記を書く時は、普通次の事柄を注意して書き落とさないやうにする。／＼1、月日。2、天気。3、その日の主なる事件。4、他人との交渉約束。5、感じたこと。6、手紙の往来。7、読書。8、計画とか予定。／勿論この全部を毎日書く必要はないが、これからの項目でも、それに該当する事柄があれば、漏らさず書きつきたい」と〈日記〉に必要な事項をあげている。日記帳そのものにも目を向けると、『現代作文新講』（早稲田文学出版部 一九三三年）では、市販されている日記帳には、「日付・天気・起床・就床・訪問・発信・受信・記事欄などが定められている」とあり、〈日記〉にはある程度きまつた形式が必要とされていたことが分かる。その形式を小説に取り込んだものが、日記体小説である。だとすれば、「日記」という小説の持つ〈日記〉性は別の点にあると考えられる。

「日記」は、形式的には〈日記〉ではないが、書かれる内容は非常に〈日記〉的なものである。「日記」は次のような書き出しで物語が始まる。

考へ事をしてゐるときは、働いてゐるときだといふ。私は四六時ちゆう何をするともなくぼんやりとしてゐる。かつて心に受けた痛みをあれこれとのぞくり返してゐるだけである。たまに動いた人間の心を感じても考へればもうどれが正確なものだかわからない。(中略) もういつの間やらおのれの心の正態もなくなつて、ああさうだ、もうすぐ子供が生まれるのだとまた思ふ。<sup>18)</sup>

「日記」は「私」が考へごとをしている場面からはじまる。「私」は、そうしているうちに、「おのれの正態もわからなくな

り、もうすぐ自分の子どもが生まれることをふっと思い浮かべる。ここでは一様に、「私」の思考が綴られていることが分かるだろう。

「私」が「日記」として綴る内容は、一九三〇年頃〈日記〉に書くべきこととして共有されていた内容と合致する。『日本現代文章講座』（二九三四）の「日記は一身の記録だ。人に見せることが、本来の目的ではない。したがって、どんなプライベートなことでも、自分のまことのすがたを、隠さずに記録してゆくがよい」<sup>19</sup>や、『現代作文新講』（一九三三）の「日常生活の忠実な記録である。しかも、単な生活記録として日々の行動・起床・見聞を書き留めるばかりではなく、自分の思うたまゝ、感じたまゝをも、憚りなく書きつけることができる」<sup>20</sup>を見ると分かるように、〈日記〉には書き手が自分自身の日常生活において感じたことや考えたことが憚りなく書かれるべきとされている。「日記」でも、「私」は妻の出産、子どもの病氣といった自身の生活に根ざしたことが、「ああさうだ」とつぶやきながら思いつくままに書かれている。「日記」における〈日記〉性は形式的な面にはなく、内容面にかかわっていることがここから分かる。

「日記」では、「私」が自身の考えていることと向かいあう場面が多く描かれる。「私」が子どもの生命を救うために医者を探す物語の最終場面では、次のような事が綴られる。

何と云つてもこんなひどい間違ひのつづきのなかでも今日子供が死ななかつたといふことは、医師の方で何と云はうとも、子供が助かるといふ報せだと強く思はれて来て、疲労もそのため次第になくなつて来るのを感じた。全く何が幸ひなことになるか分からない。よくよく考へてゐれば、多分何事もかういうやうなものなのであらう。この幸せな感想をもつて先づこの日の日記をここで終らうと思ふ。<sup>21</sup>

この物語では、妻の出産に始まり、子どもの生命の危機にみる不幸の連続を通して「私」が「幸せな感想」を抱くまでが

描かれる。ただし、陣痛の痛みに悩む妻や病に苦しむ子どもの姿の具体的な描写はなく、それらはあくまでも、ひとつのできごととして綴られるのみだ。「日記」の「私」が重視するのは、妻や子どもにふりかかる出来事から、自分自身がなにを感じ、どのように思考するかである。「私」は〈日記〉を綴ることによって、自身に降りかかる不幸や疲労も「幸せ」なものとして解釈するにいたるのだ。つまり、「私」は〈日記〉を書くことで、自身の体験を検討しながら自身の思考を整理しようとしているのである。

「厨房日記」にも「日記」の「私」のように自らの経験を検討する人物が描かれている。ヨーロッパから帰国した「梶」が、東北の温泉場で妻の「芳江」にヨーロッパで知った奇妙なできごとを語る場面から物語は始まる。

スプスのその街ではシュールレアリズムといふ心理形式の発会式が行はれた。(中略)さていよいよその日になつてシルクハット、モーニングの市長を初め、紳士淑女が陸続と盛装で会場へ詰めかけて来た。しかし、いつまでたつても会は一向に始まらない、そこで皆はぶつぶつ云ひ出した。夜はそのままいたずらに更けていくばかりだ。(中略)次の日の新聞には大きくその夜の発会式の写真が一斉に出てゐたのだ。つまりそれが発会式なのだ。梶はそこまで話して妻の顔を見た。

「それがどうしたの。」と芳江は訊ねた。

「それだけさ。」

「それがそういふことなの。世の中が無茶苦茶になつたから、自分たちもさうしたつていふの。」

「まあそれでも良い。」と梶は云ふよりも仕方なかつた。<sup>(2)</sup>

「厨房日記」も「日記」と同様に日記形式で書かれたものではない。さらに、中心人物を「梶」として三人称視点で書かれ



ている。この場面では、ヨーロッパで起きたシュールレアリズムの集会にまつわるできごとが「梶」から「芳江」に語られている。「梶」は、このできごとに関して「ヨーロッパを廻つて来てこの話に一番興味を覚えたが、説明の出来る種類の話ではない」と述べており、自分自身では解釈できる範疇を越えたものとしている。そこで「梶」がとる行動は、他者に体験を語ることだ。「梶」は、話を聞いた妻の反応をうかがうものの、大した反応を受け取ることができない。そこで次に友人に同じ話をしてまわるのだが、「皆黙つて真剣な顔」になつたり、「顔を蒼く」したり、笑いだしてしまつたりするだけで、「梶」にとつて何か有益な見解が出てくるわけでもない。そこで「梶」は、引用にある話に興味を示さない人物には、きまつて別の話をして、自身の体験をさらに語つてゆくのである。ここから、「厨房日記」では、帰国後に海外体験を検討しようとする「梶」という人物が描かれているといえよう。『歐洲紀行』で横光は、〈紀行文〉によつて自身の体験を綴るだけでなく、小説「厨房日記」を書くことによつて、その体験から何を待たのかを検討する過程まで描こうとしているのではないだろうか。

### (三) 『歐洲紀行』と『厨房日記』の連続性

「厨房日記」では、海外体験を検討する「梶」の姿が、あるいは段階的に自身の体験を検討してゆく「梶」の姿が描かれている。はじめは冒頭から始まる「梶」の語りである。「梶」は「芳江」や友人に海外で知ったこと、体験したことを語っていた。シュールレアリズムの開会式の話やツアラとの会食のエピソードが詳細に伝えられている。「梶」は帰国後もなおヨーロッパに目を向けることで自身の体験を検討しようとしていることがわかる。ただし、「梶」のヨーロッパ体験が語られる場面においては、「梶」が海外体験から何を感じ、ヨーロッパをどのように捉えたのかがほとんど描かれぬ。冒頭では、「芳江」や友人の反応をうかがう「梶」の様子が確認できるものの、物語が進むにつれ「梶」の体験だけが語られてゆくので

である。いくらヨーロッパをだけ見つけていても、海外体験が「梶」にとつて「説明の出来る種類の話ではない」ことは変わらないのである。

「梶」に変化がおとずれるのは、「日常生活」が始まろうとしたその瞬間だった。

梶は水を飲みつつ再びこれから前の定着した日常生活が始まらうとしてゐるのだと思つた。しかし、しばらく日本の時間を脱してゐた梶の感覚は自分の家族の生活がこの東洋の一角にあつたのだと知つて、不思議な物を見るやうに妻や子供を手探り戻さうし始めた。それにしても、何と自分は大きな物を見て来たものだらう。あれが世界といふものかと、梶は自分の子供の顔を眺めて始めて世界の実物の大きさにつくづく驚きを感じるのであつた。<sup>23</sup>

帰国後も今まで通りの「日常生活」が始まるものだと思つていた「梶」だったが、家族の顔を見ると今までにない不思議なものを感じ取る。このとき「梶」は、「何と自分は大きな物を見て来たものだらう」と自身の経験に実感を覚え、「始めて世界の実物の大きさにつくづく驚きを感じる」のである。ここで「梶」は、ヨーロッパを見つけていただけでは見出せなかつたヨーロッパの姿を、「日常生活」に目を向けることによつてようやく実感するのである。

さらに、「梶」は「全く自分の見て来たものも知らずにまだ前と同じ良人だと自分を思つてゐる妻の芳江」が何となく憐れに見え、周囲の見え方に違和感を覚える。「異文化を深く体験したものは、自己のアイデンティティが根底から揺さぶられてしまい、帰国したあとも、二度ともとの状態には戻れないのである。自分自身との関係も、周囲との関係においても一種の、文化の間で宙吊りになつた状態に陥るのである」と、磯前が言うやうに、「梶」は自身の海外体験をはつきりと捉えると、「いつたい、どこを自分はうろろしてゐるのだらう。この自分の坐つてゐる所は、これや何といふ所だらう」と海外体験を経た自分自身が「宙吊り」状態にあることを自覚するのである。これこそ『厨房日記』と『歐洲紀行』とに連

統する問題意識なのだ。

『歐洲紀行』では、ヨーロッパへの期待が裏切られたことがかかれ、横光が「宙吊り」になっている様子がかげえる。「多くの日本人にとって、パリは西洋の先進文明の精華として、圧倒的な体験と印象を与え続けてきた。「花のパリ」という日本独自の呼び名にも見られるように、パリは常に日本人の「憧れの都」であり、近代日本文学、文化に深い影響を与えている」と言われるように、パリおよびヨーロッパは、近代日本人にとって常に先をゆく「憧れの地」であった。『歐洲紀行』<sup>(26)</sup>でも、「紅海の前にマルセーユでも見え出してくれたなら、私はどんなに喜びを感じたことだろう」とヨーロッパの入り口を目前にした高揚感が語られている。

しかし、パリに到着した横光の記事には困惑した様子が描かれる。「雨。巴里へ着いてから今日で一週間も立つ。見るべき所は皆見てしまった。しかし、私はこの事は書く気が起らぬ。早く帰ろうと思う」と書くべきことを迷っている。パリから送られた「家人への手紙Ⅰ」では、「着いた二三日は文化の相違のために眼をまわしたが、もう飽きてしまった」と横光が目にしたパリに肩を落としている様子がうかがえる。長年憧れていたというウィーンに到着しても、「来て見ると、私は何の魅力もここから感じない」と目の当たりにするヨーロッパの姿に落胆している。その中で横光の心を惹くのは長いヨーロッパの歴史に支えられた伝統的な文化である。ウィーンの都に魅力を感じなかった横光だったが、「ハプスブルグ家代々の都であるから、衰えたとは云え、土の光りに脂のにじんだ後が歴然と感じられる」と伝統のなかに価値を見出している。先に挙げた家人への手紙のなかでも、横光はヨーロッパに到着した感激を綴るのでなく、「日本の田舎の温泉に行きたくて仕方がなくなる」と手紙を結ぶ。ヨーロッパへの期待を失い、「宙吊り」になった横光が新しいものではなく、これまで積み重ねてきたものの再評価に向かつていく姿がここにある。

「厨房日記」の「梶」も「いつたい、どこを自分はうろろしてゐるのだらう。この自分の坐つてゐる所は、これや何と

いふ所だらう」という問題に立ち向かうと、これまで度々訪れている東北の地を再評価する方向に向かう。

今まで度々東北地方へ来たにも拘らず、梶はこの度ほどこの地方の美しさを感じたことはなかった。親子兄妹が同じ町内に住んでゐながら、顔を合わせば畳の上へ額を擦りつけて礼をするのも、奇怪以上に美しく梶は惚れるのであった。稲穂の実り豊かに垂れてゐる田の彼方に濃藍色に聳える山人の線も、異国の風景を眼にして来た梶には殊の外奥ゆかしく、遠いむかしに聞いた南無阿弥陀仏の声さへどこから流れて来るやうだった。

梶はこの風景に包まれて生まれ、この稲穂に養はれて死ぬものなら、せめてそれを幸福と思ひたかつたのが、今にしてやうやくそれと悟つた楽しさを得られたのも、遅まきながら異国の賜物だと喜んだ。<sup>(28)</sup>

ここで「梶」は、「異国の風景」と東北の地を対比させ、東北の農村に美しさを見出している。そして、そのような風景に囲まれていることが幸福なことであると解釈しようとする。文化の間で「宙吊り」になつていた「梶」は、農村の風景に新たな連帯を生み出すのだ。この点からは、『歐洲紀行』から引き継がれた問題意識が「梶」にもあり、問題の解決方法として、『歐洲紀行』と同様に積み重ねてきたものの再評価が行われている。

ただし、「厨房日記」は、封建的なものを礼賛する物語にとどまらない。「梶」のまなざしは、東北の農村から次第に日本という大枠へと向けられ、「梶は日本の変化の凄しさを今さら見事だと思つた。寝足りた朝のやうに平凡な雑草まで眼をとめて眺めたいのは、これは自分も一人前に成長して来たからだと思われた」と「梶」は、日本を賛美するようになる。すると「梶」の身に事件が起きる。四つになる次男がいつまでたつても家に帰つてこないのだ。「梶」は暗闇のなか子どもを探す。すると「梶」は次のような思いを浮かべる。

ふと、自分も子供と同じやうな眼にのつてゐるのではないかと思つた。知らぬ間に全く考へもしなかつた複雑な夜道  
が自分の八方についてゐて、どこをうろついてゐるのか分からぬのではないかと思はれた。<sup>27)</sup>

「梶」は再び自分自身がどこをうろついているのか分からなくなつてしまふ。子どもを見つけることができずに帰宅しても、  
気が気でなくなり再び駆けだそうとする。しかし、どこに向かつていいのか見当もつかず、空しさを募らせる。「梶」は、  
知らぬ間に再度「宙吊り」の状態に陥つてしまつてゐるのである。

事件は意外な顛末をむかえる。「梶」が探しつかれて帰宅すると、迷子の次男は勝手元にはんやりと立つていたのだ。「芳  
江」から交番の椅子にひとりで腰かけていたそうだと聞かされると、「梶」は立ちすくんでしまふ。そして「梶」は、「世  
界の思想や情勢に頭を使ひ、日本のあれこれを思ひ悩んだ自分の考察も、根元から吹き上げられてはこのやうに無力にな  
るのか」と思いながら海外に行く前から敷いてある寢床へ身を横たえるのである。「厨房日記」では海外体験を経た「梶」  
が異文化の間で「宙吊り」になつてゐる状態から、農村の美しさや日本の優位性を見出す過程が描かれてゐる。この点に  
注視してしまえば、中条百合子らのような批判が出るのも肯ける。ただし、「厨房日記」の到達点はそこではない。この物  
語が行きつくところは、「あーあ。もとの黙阿弥か」という「梶」の口から思はず出た言葉によく表れてゐるやうに、これ  
から先はどの方向へ向かつたらいいのか。これはふさわしい目標を無くした文学者、知識人が直面する現実である。

海外体験を経たひとりの人物が、過去を検討し、現実を見つめ、これから進むべき未来をまなざす姿が「厨房日記」に  
は描かれてゐる。「厨房日記」が収録されることによつて『歐洲紀行』は、海外を訪問して戻つて来る過程を単純に描くよ  
うなありふれた〈紀行文〉の枠を超え、未来をも映し出す新たな文学テキストとなるのである。

以上のように、「歐洲紀行」と「厨房日記」との連続性が明らかになつたことで、単行本『歐洲紀行』に「厨房日記」が  
収録されたことの意義を見出すことができた。ただし、〈紀行文〉である『歐洲紀行』に小説でありつつ、〈日記〉の要素

を含む「厨房日記」をあえて収録する必然性がどこにあるのかという問題がまだ残されている。この問題に目を向けるとするならば、横光ひとりだけではなく、昭和十年代の日本文学をとりまく問題にまで視野を広げなければならぬ。

昭和十年代は新しい文学の形式を模索する時代であり、日記や書簡など、他のジャンルを小説に取り込んだ作品が多く書かれた時期である。たとえば、『歐洲紀行』と同時期に発表されている『溼東綺譚』では、巻末に置かれた「作後贅言」に「向島寺町にある遊里の見聞記をつくって、わたくしはこれを『溼東綺譚』と命名した<sup>(28)</sup>」とあり、小説として発表された『溼東綺譚』が、本来「見聞記」だったことが明かされる。「見聞記」という事実を土台にしたジャンルが小説内に現れることによって、作品そのものの虚構性と事実性との均衡が崩れることになる。さらにこの当時文壇に登場した太宰治は、『虚構の春』をはじめとして書簡体小説や日記体小説を執筆しており、他のジャンルを小説に取り込むことで新たな小説の形式が模索されるようになる。昭和十年代の文学における虚実の問題については、より詳細な分析が必要とされるが、『歐洲紀行』が発表された背後でそうした問題が取りざたされていたことは確かである。

この点を踏まえると、『歐洲紀行』は当時の文学者が抱えていた問題意識を反映し、かつ実践した作品であるといえるのではないだろうか。〈紀行文〉、〈日記〉、小説といった複数のジャンルが『歐洲紀行』に混在していることは前に述べた通りである。本来事実を土台にして描かれる〈紀行文〉と虚構を土台にして描かれる小説とは虚実のレベルにかなりのひらきがあるが、事実性が求められる〈日記〉の要素を小説に含ませることで、『歐洲紀行』では虚実のレベルを一定の水準でまとめようとされていると考えられる。そうすることで、『歐洲紀行』と「厨房日記」に必然的かつ有機的な連続性が生まれるのである。

注 (引用に際して基本的に旧漢字は新字に改め、歴史的仮名遣いは原文のままとした)

(1) 文学史をたどると、近代における〈紀行文〉の定義は、明治時代より活発に議論されている。一九三〇年代では、〈紀行文〉を「人のためには道の土地の案内記ともならう。まづければまづいなりに、よい文であれば尚更、思い出の種となり、意外な資料ともなる」(服部嘉香「現代作文新講」一九三三)と記録的要素を土台にしつつ、「自分の持味、個性を閉却してはならない。誰でも書ける通り一遍の紀行文などといふものはいくら書いたところで、つまらない」(久米正雄「文章の作り方」一九三七)と書き手の独自性を求めている。一九三〇年代における〈紀行文〉は、事実を描くことを前提としつつ、一定の虚構性を認めるジャンルとして捉えることができる。本論でいう〈紀行文〉は、一九三〇年代の〈紀行文〉観に則ったものである。

(2) 中条百合子「迷ひの末——『厨房日記』について」(『文藝』一九三七年二月号)

(3) 中村光夫「文芸時評(2) 横光の『厨房日記』——新年号の新作から」(『報知新聞』一九三六年十二月二十七日)

(4) 中島健蔵「文学と民族性について」(『改造』一九三七年三月号)

(5) 河上徹太郎「解説」(『横光利一全集』第六卷 河出書房新社 一九八二年)

(6) 横光利一「厨房日記」(『改造』第十九卷二号 一九三七年一月号) なお引用は『定本 横光利一全集』第七卷(河出書房新社 一九八二年 頁六四五)による。以降、本文引用の際は作品名と頁数のみ記載する。

(7) 横光利一『『歐洲紀行』(創元社 一九三七年) なお引用は『定本 横光利一全集』第十三卷(河出書房新社 一九八二年 頁三八三〜三八四)による。以降、本文引用の際は作品名と頁数のみ記載する。

(8) 横光利一「解題に代へて(二)」(『新日本文学全集』横光利一集』改造社 一九四〇年) (なお、引用は『定本 横光利一全集』第十三卷 河出書房新社 一九八二年)

(9) 横光利一「当番記」(『文藝懇話会』第一卷第十二号) (なお、引用は『定本 横光利一全集』第十四卷 河出書房新社)

(10) 中川智寛「横光利一『歐洲紀行』と『厨房日記』の関係性について」(『近代文学論集』第三十四号 二〇〇八年)

(11) 『『歐洲紀行』』頁一九一

(12) 横光千代子宛書簡(三月十日消印 箱根丸より東京市世田谷区玉川用賀一―一五二八齋藤弘次方) (なお、引用は『定本横

- 光利一全集』第十六卷 河出書房新社 一九八七年)
- (13) 竹盛天雄「日記の文体——荷風の場合」(国文学解釈と教材と研究』第二十九号第五卷 一九八四年)
- (14) 一九三七年の十二月二十六日に次男祐典が生まれている。(戸籍届出は翌年一月十三日) 息子が丹毒に罹ったという記録は残っていないが、発表の時期を考えると実体験を題材にしていると考えるのが妥当である。
- (15) 佐々木基成「物象化される〈内面〉——日露戦争前後の〈日記〉論」(『日本近代文学』第六十七集 二〇〇二年)
- (16) 久米正雄『文章の作り方』(『入門百科叢書』第四卷 新潮社 一九三七年)
- (17) 服部嘉香「十二章 まづは日記文から」(現代作文新講』早稲田文学出版部 一九三三年)
- (18) 横光利一「日記」(『経済往来』第八卷第八号夏季増刊新作三十三人集 一九三三年) (なお、引用は『定本横光利一全集』第五卷 河出書房新社)
- (19) 白石実三「日記文の表現と指導」(日本現代文章講座』第六卷 前本一男編 厚生閣 一九三四年)
- (20) 服部嘉香「十二章 まづは日記文から」(現代作文新講』早稲田文学出版部 一九三三年)
- (21) 注18に同じ
- (22) 「厨房日記」頁六三四～六三五
- (23) 「厨房日記」頁六五一～六五二
- (24) 磯前順一「喪失とノスタルジア 近代日本の余白へ」(みすず書房 二〇〇七年)
- (25) 今橋映子「異都情懷 日本人のバリ」(平凡社 二〇〇一年)
- (26) 「厨房日記」頁六五三
- (27) 「厨房日記」頁六六四
- (28) 永井荷風『溼東綺譚』(岩波書店 一九三七年) (なお、引用は『荷風全集』第九卷 (岩波書店 一九六四年))

(文化創造研究科文化創造専攻国文学領域博士課程前期二年)